

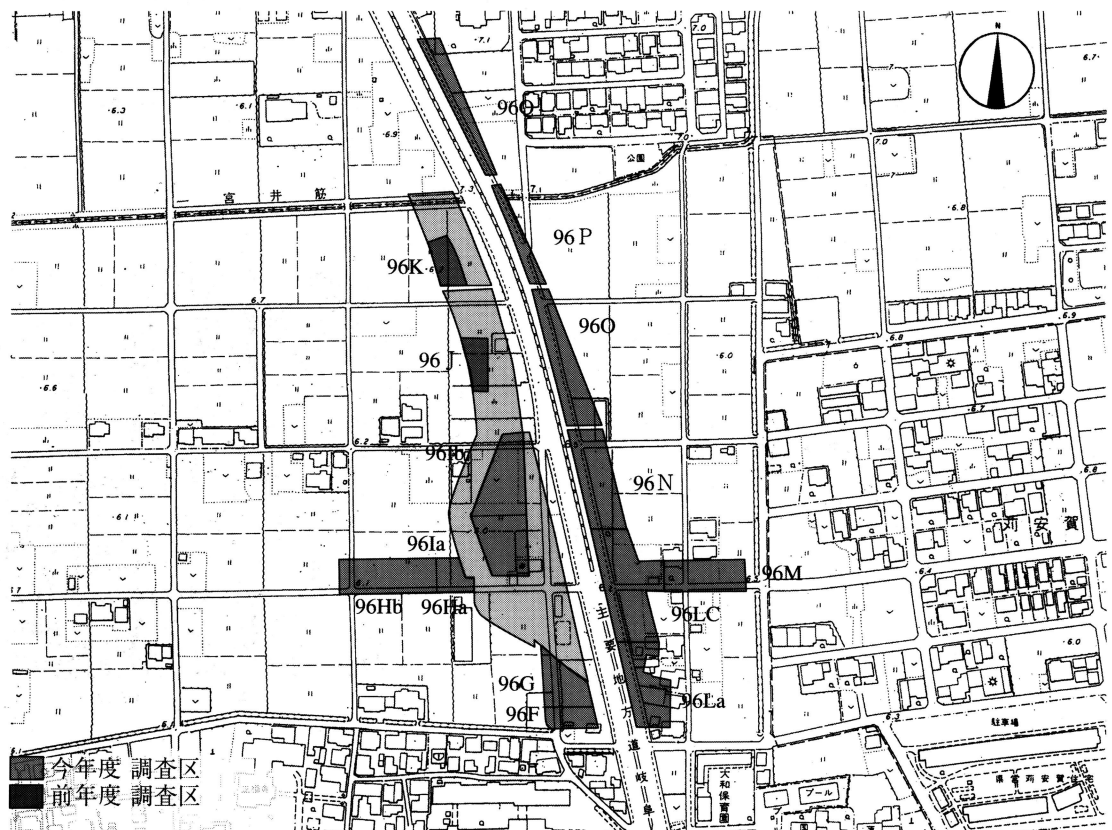
はちおうじ 八王子遺跡

調査の経過 八王子遺跡は、一宮市大和町荊安賀に所在し、木曾川水系日光川流域に展開する標高5～6mほどの自然堤防および微高地上に立地している。現在遺跡周辺はほとんど水田化されており往時の様子をみることはできないが、近世以降には島畠が点在し、それ以前は比較的起伏のある地形であったと推定される。

発掘調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として昨年度に引き続いて実施されたもので、調査面積は14,759㎡である。

調査の概要 本年度は調査対象地区が尾張中央道の東西に分散したこと、さらに用地買収や建設工事の進捗状況との調整のために小刻みな調査工程となり、A区からQ区までの17調査区がさらに細分されるという事態が生じ、そのために調査進行上若干の支障をきたすことになった。

調査は昨年度の成果を踏まえて進めたが、いくつか新しい成果も得られた。たとえば、弥生前期の環濠の外と考えられていた96 O区では弥生前期の遺構群が密集して検出され、昨年度検出された環濠がじつは西限を画すものである可能性が高くなった。また96 I区では古代と中世という時期の異なる2条の溝が相對するように円弧をなして掘削されて一見円形の区画を形作るような部分が検出された。とりわけ、96 O区で「蛇塚」の周溝と推定される溝や美濃帯チャート製の直方体を呈する大形の角礫が検出され円墳の存在が確実となったことから、それがかつて存在した古墳後期に展開した群集墳の痕跡を示している可能性が高くなった。今後は報告書に向けて資料の詳細な検討が必要になろう。

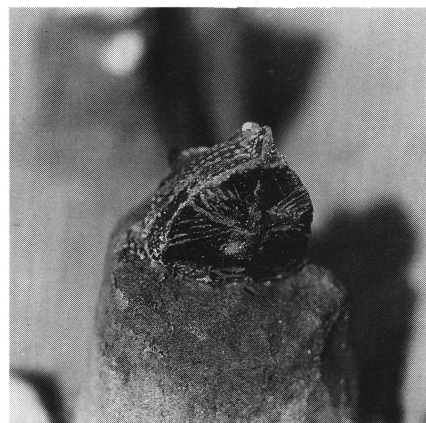


第1図 八王子遺跡調査区位置図(1:5000)

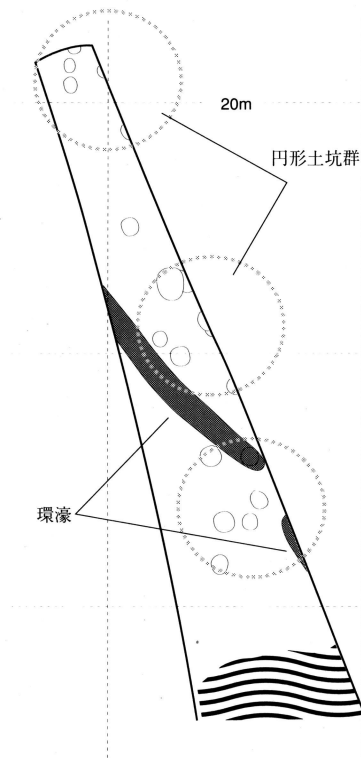
時期区分 八王子遺跡は昨年度の調査によって弥生時代前期から鎌倉・室町時代まではほぼ途切れることなく営まれた遺跡であることが明らかとなった。ただし、遺跡の性格の変化や自然環境等の外的要因による居住区の変遷など、時期によっていくつかの画期が設定される。ここでは、昨年度の調査成果を踏まえてA期：弥生前期～中期、B期：弥生後期～古墳前期、C期：古墳中期～後期、D期：奈良・平安時代、E期：鎌倉・室町時代に分け、昨年度の年報には調査工程上、掲載が間に合わなかった部分を含めて記述を進めて行くことにする。

各期の解説 **A期** 弥生前期は95B a区の調査で、95A b区で確認した環濠のさらに西側でもう1条の環濠を検出し、これら2条の環濠の途切れる部分を確認した。西側の環濠では南から延びる溝がこの部分でさらに二又に分かれているなど複雑な様相を呈している。本年度は95B a区の西にあたる96J区で西側の環濠がさらに北へのびることを確認した。また、96O区でも幅約2m、深さ約0.7mの北西から南東にのびる溝を検出しており、主としてこの溝より東側に弥生前期の遺構が集中している。そのため、昨年度の調査で想定したように95A b区から95B a区の西側に弥生前期の居住域が展開し、これを拡張して弥生中期の環濠を築いたとするより、96O区の溝を弥生前期の内環濠として居住域はこれより東に展開しており、95B a区および96J区の環濠は外環濠にあたると考えたほうが自然ではないかとする結論に至った。そして、95A b区から95B a区にかけての環濠は上層から大量に出土した弥生中期中葉の土器をもって、弥生中期にまで下げるべきであるとの認識をもつこととなった。なお、今回新たに確認した内環濠にも溝が途切れる部分があり、その切れ目の位置には土器棺墓や埋設土器などが見つかっている。また、内環濠からは土偶の頭部が出土している。昨年度の調査でも、95B a区の弥生前期の環濠（今年度の調査で外環濠と認識した溝）から土偶の頭部が出土しており、これで本遺跡では2例目になる。この時期、95B a・95C・96I b・96O区の南半部から荊安賀遺跡にかけての調査区では北東から南西に流れる幅数百mにおよぶ河道を確認しており、この北岸が弥生前期から中期中葉にかけての集落の南限と考えられる。

弥生中期前半～中葉には弥生前期の居住域の西側に新たに居住域が設けられている。前述のように昨年度弥生前期の外環濠と考えていた溝がこの時期に下がるのが判明したことにより95A a区で2条の環濠と合わせて3条の環濠が集落を巡ることが明らかとなった。95A a区で見つかった2条は本年度は西接する96K区のはほぼ中央を南東から北西に横切っており、西尾張中央道を隔てた東の96O区では外環濠の続きを確認した。規模はいずれも幅約5m、深さは約1.5mで、断面はV字形である。95B a区と96J区はこの時期の居住域にあたる。



96O区 環濠出土土偶頭部片

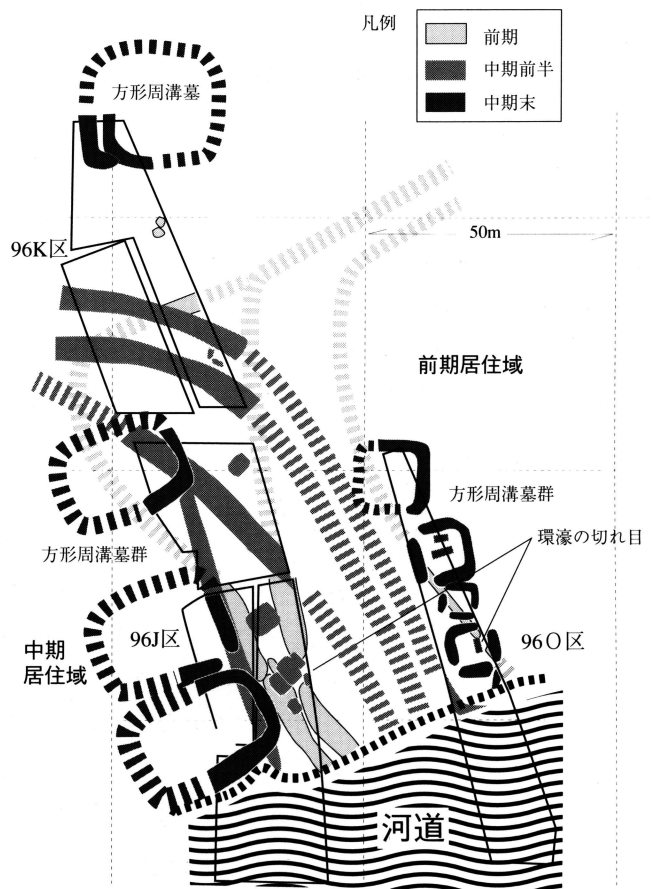


第2図 96O区 弥生前期の遺構群
(1:600)

に較べてマウンドの遺存状況が極めて良好である。埋葬施設は北から2番目の墳丘墓で2基、最も南の墳丘墓で1基検出した。埋葬施設は長軸が北の墳丘墓で東西方向、南の墳丘墓は南北方向で、組み合わせ式木棺の痕跡が比較的明瞭に認められたが、副葬品はなかった。西尾張中央道の西に展開する4基の墳丘墓がいずれも一辺10mを超える大型のものと想定され、しかも散発的に配置されているのに対し、96O区の墳丘墓は1基を除くといずれも規模が小型で比較的密集して築かれている。しかも、96O区の4基の墳丘墓は周溝の幅が狭く、遺物の出土量は西尾張中央道西側の一群に較べて各段に少ないなど、東西で格差が認められる。

95Ba区では弥生中期中葉の竪穴住居を6棟検出した。うち、調査区北端近くで検出した竪穴住居は多くの土器とともに炭化した建築材が比較的良好に残る焼失家屋である。

弥生中期末には環濠が埋め立てられ、それまでの居住域墓域に変わる。この時期の遺構としては、95Ba区で墳丘墓の東・南側の周溝を検出し、本年度は96J区で東溝の続きと北溝、そしてその間の陸橋部を確認した。その結果、この墳丘墓は短辺が約13m、長辺は西溝が調査区外であるために未確定だが20m以上の規模になることはほぼ間違いなく、この時期としては全国的にも有数のきわめて大型の墳丘墓といえる。この墳丘墓に北接してもう一基、墳丘墓を確認している。また、西尾張中央道をはさんだ東側の96O区では4基の墳丘墓を検出した。うち、北側の2基は検出面で一辺が約10mの長方形で、その南に接する2基は一辺が5m前後である。いずれも西尾張中央道西側の墳丘墓

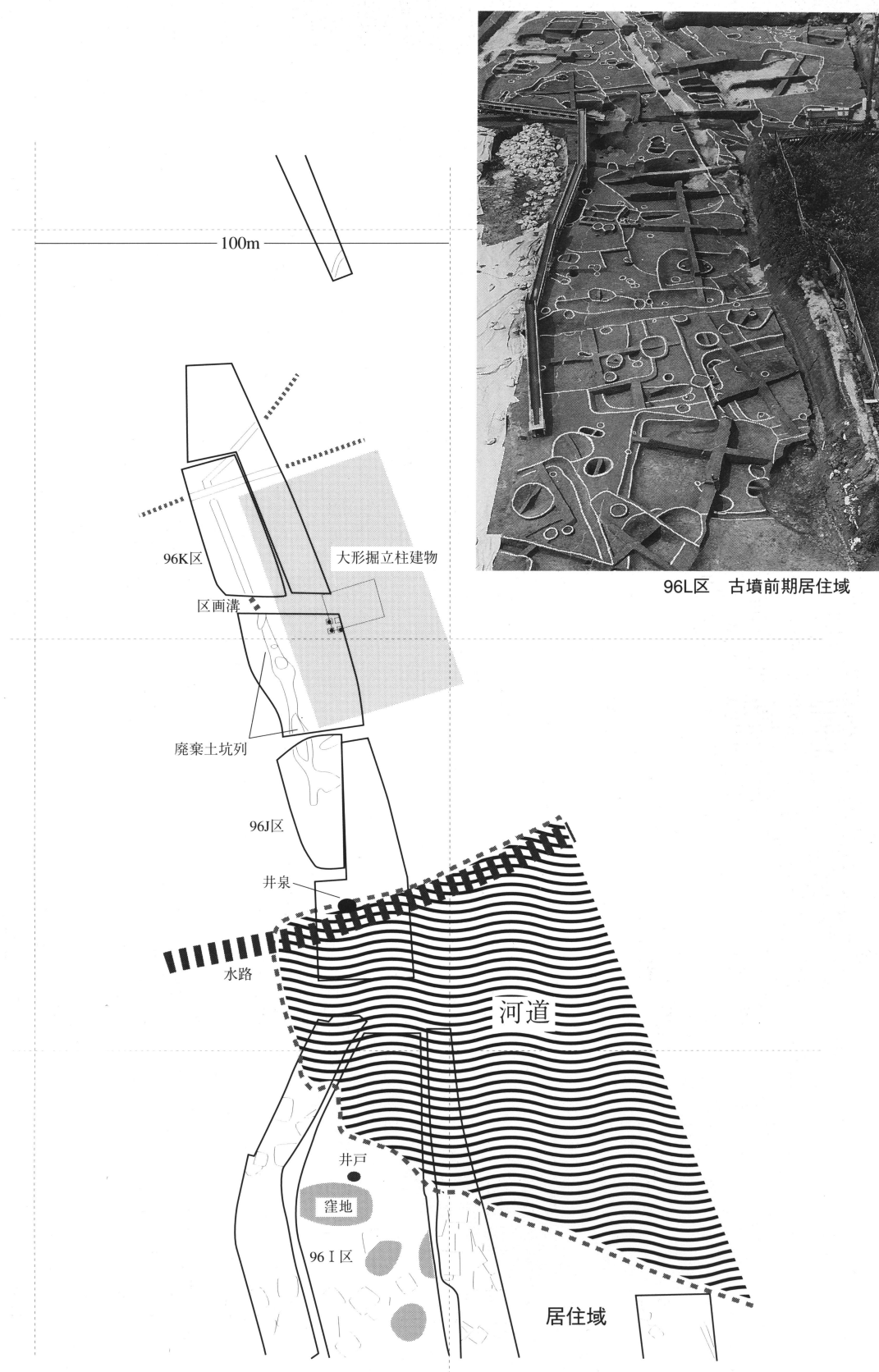


第3図 弥生時代遺構配置図 (1:1500)

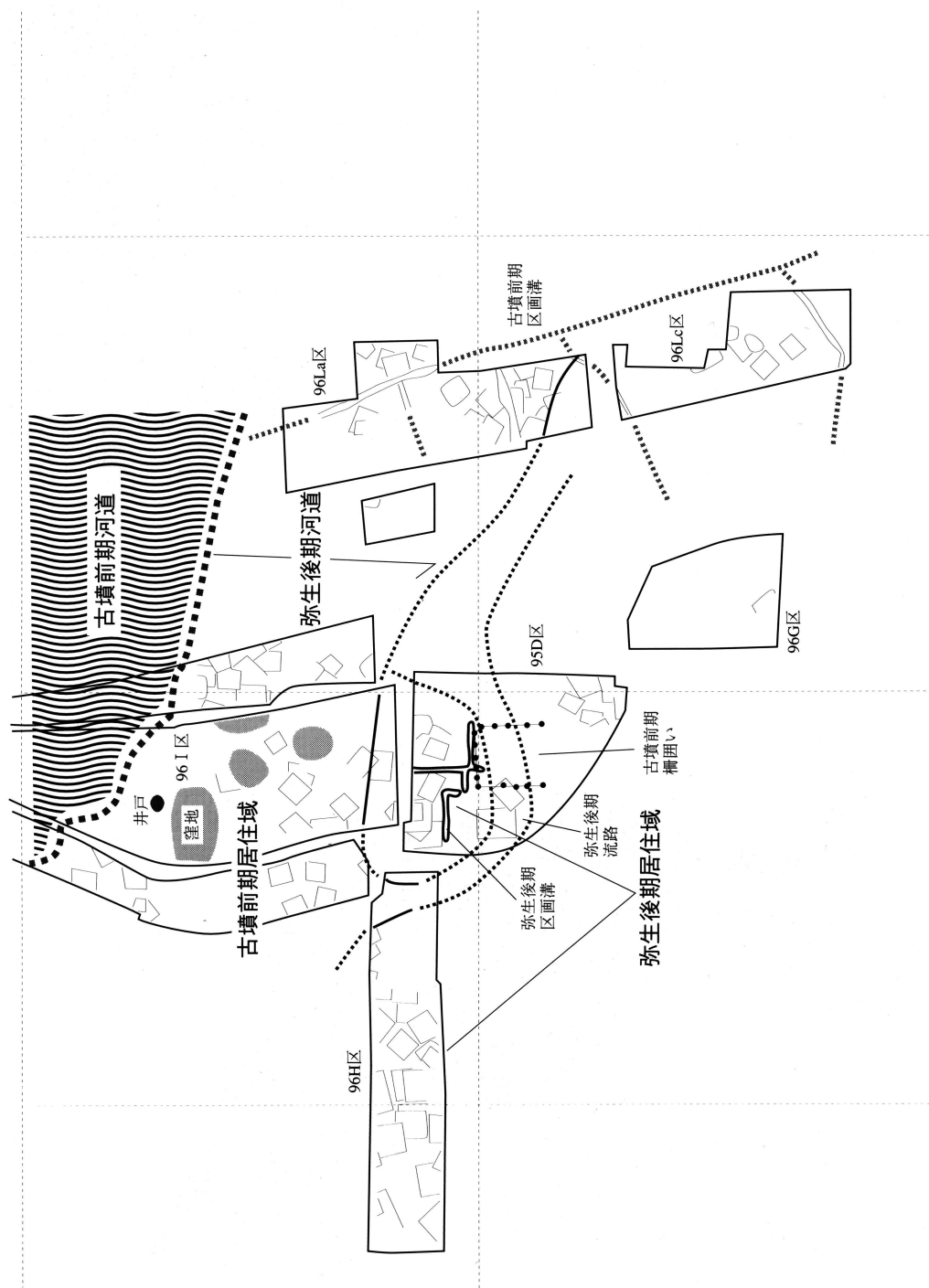
この時期の居住域は現在のところ不明だが、地形的に西の方が高く、96 J 区の墳丘墓の溝からは多量の土器片とともに厚い炭化物層を確認していることから、調査区のさらに西に展開している可能性が高い。

B 期 尾張平野では弥生中期終末から後期前半にかけて河川の活動が活発化する。八王子遺跡でも、山中期には河道の堆積が進んで微高地化し、そこに新たに居住域が営まれるようになる。逆に中期中葉までの居住域や中期末の墓域周辺は湿地化して放棄されたようである。後期の居住域は95 D・E 区を中心とし、北は96 I a 区の南端、東は96 L c 区の南半部、西は96 H a 区の北半部を範囲とする東西に長い島状の微高地に形成されている。96 I a・I b 区の大半と96 G 区全域、96 H a 区の東端部、96 L c 区の南端部ではそれぞれこの時期の自然流路が確認されている。居住域の周囲には環濠はもたないが、95 D 区では居住域内を区画する溝が検出されている。

古墳前期初頭（廻間 I 期）には居住域がさらに拡大する。95 B b～E 区および96 I a・I b 区に新たに居住域が展開し、検出した竪穴住居は70 棟を超える。河道本体は東へ後退し、かろうじて右岸が「く」の字状に東から西へ張り出している。新たに掘削された水路を挟んだ北の地区（弥生中期までの居住域の上層）には、大型掘立柱建物や井泉などの祭祀的な空間が設けられている。大型掘立柱建物は95 A b 区の北東隅に位置し、一辺が1 m を超える柱掘形を4 箇所検出しているが、北・東とも調査区外に広がっているため、東西・南北とも規模は不明である。この建物は昨年度の調査では柱掘形の規模などから古代に属する可能性を想定したが、今年度の調査でこの建物を囲むように北と西でそれぞれ弥生後期後半から古墳前期初頭に属する溝を検出したために、掘立柱建物も同時期であると考えた。北辺の溝は95 A a 区と96 K 区において、建物の南辺の柱列から北へ約45 m の位置に東北東から西南西の方向に伸びているのを確認している。西辺の溝は先の溝にほぼ直交して、95 A b 区とその両隣にあたる96 J・K 区で建物の西辺柱列から西へ約14 m の位置を、北北西から南南東の方向に約80 m にわたって検出した。南端は96 J 区のほぼ中央で「ト」の字状に東へ若干突出する形で終わっている。95 B a 区では南辺の溝を検出していないため、建物を中心とする区画の南側は河道に面してオープンであった可能性が高い。これらの溝からは山中式後期後半から廻間 I 式期初頭の土器が多数出土している。調査区の東側を西尾張中央道が南北に分断しているため、大型掘立柱建物を中心とする区画の東西幅は確認できない。この西辺の溝を南に延長した95 B a 区の河道の北肩に大規模な木組みをとまう井戸を1 基検出した。直径約5 m のすり鉢状の掘形を掘削し、中央に直径約1 m の水溜めを掘っている。掘形の内側には河道側に面して馬蹄形に乱杭を打ち込み、その杭にかかるように加工を施した巨大な丸太材や板材・槽の破片などを横材として用いた木組みで囲っている。この井泉の内側および河道内に掘削された幅8 m、深さ2 m の水路からは銅鏃・ガラス小玉各5 点、コハク玉・ヒスイ勾玉各1 点、剣形・刀形木器などの祭祀にかかわる遺物のほか、廻間 I 期初頭に属する大量の土器群が出土した。土器は小型精製の壺・鉢・高杯・器台や手づくねによるミニチュア土器がほとんどで、わずかにみられる甕類も大半が使用の痕跡をとどめていないのが特徴である。このほか水路内からは使用痕の



第4図 弥生時代後期～古墳時代遺構配置図（1：1500）



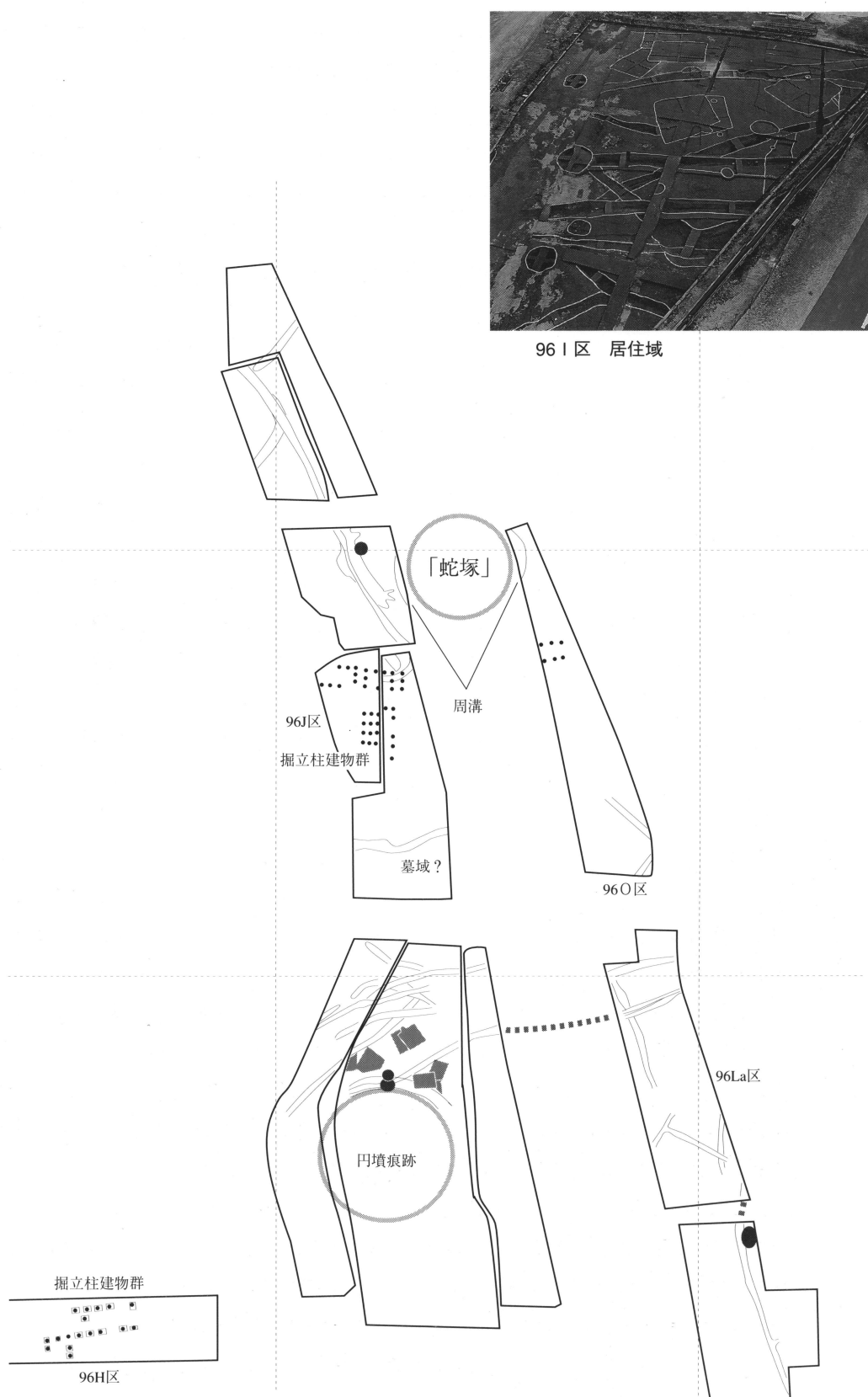
第5図 弥生時代後期～古墳時代遺構配置図 (1 : 1500)

ある木製農耕具類も若干出土している。この水路の続きは96 Q区でも検出しており、95 B a区同様、多くの土器・木器が出土した。居住域は廻間Ⅲ期頃になると、95 D区のほぼ中央に北・東・西の三方に柵列をめぐらす一辺約12 mの方形広場が設けられ、その周りを囲むように95 D・E区で11棟の掘立柱建物を配置している。掘立柱建物の規模は3×2間の総柱建物1棟、3×2間の建物1棟、独立棟持ち柱のある1×1間の建物2棟、1×1間の建物7棟である。

古墳前期末（松河戸期）には木曾川流域を中心とする大規模な洪水により、浅谷は完全に埋没する。この時期、95 B b・C・D・E区では明確な遺構が確認されておらず、居住域の中心はさらに東へ移動したと考えられる。96 L c区では幅約1.5 m、深さ約0.5 mの溝が北北西から南南東にかけて貫いている。この溝に直交して南北20 m前後の幅になるように東西の溝を掘削して方形の区画をつくり、そのなかに竪穴住居を2、3棟配置する形をとっている。

C期 古墳後期の遺構としては95 A b・96 O区と96 I a・I b区でそれぞれ円墳の周溝およびその痕跡を検出した。95 A b・96 O区の円墳は周溝の外側で直径約30 mをはかる。墳丘部分はすべて西尾張中央道の下にあたるため、墳丘そのものの直径は不明だが20 m前後と考えられる。地元では「蛇塚」と呼ばれていた塚がほぼこの位置にあったことが明治14年の地籍図にも記録されている。96 O区ではこの古墳の周溝に近接する戦国期の大溝から面取りを施した巨石（美濃産のチャート）が出土していることから、蛇塚古墳の内部主体は横穴式石室であった可能性が高い。96 I a・I b区の円墳は墳丘が完全に削平されており、周溝は北側が古代、南側が中世に再掘削されたようだ。墳丘基底部の直径は約20 mである。

D期 古代の遺構はまず96 J区において、95 B a区で検出した掘立柱建物の続きを確認し、3×2間の東西棟建物であることが確定した。その西に南辺の柱筋をほぼ揃えて3間以上×3間の東西棟建物、そして3×2間の建物の南に西側の柱筋をほぼ揃えてやはり3×2間の南北棟建物を検出した。南北棟建物には床束とみられる小柱穴が伴っている。いずれも桁行の柱間が2.1 m（7間）から2.4 m（8間）ある比較的大型の建物だが、庇はない。95 B a区では建物の東側に小型の柱列が2条並ぶことから、東辺は堀で区画されており、西の方へはさらに続くものと思われる。これら掘立柱建物群の南にあたる95 B a区の旧浅谷内には奈良時代後半の墨書土器・円面硯を含む多量の土器が出土した東西溝があることから、この一画は通常の集落とはやや性格を異にしている可能性が高い。また、96 H b区でも5×1間の東西棟建物と3間以上×2間の南北棟建物の2棟の掘立柱建物が柱筋を揃えてL字形に建ち、東西棟建物の東西に2基の井戸を確認している。そのほか、96 O区では前記の区画とは方位が異なる3×1間の東西棟掘立柱建物と2条の区画溝があり、96 N区から96 L c区にかけて、北北西から南南東に伸びる溝を検出した。この溝の上層は中世に再掘削されているが、下層からは奈良時代後半から平安時代前期の遺物が多く出土している。特に96 N区では9世紀後半に属する鳥形硯の破片が出土した。猿投窯の製品で、県内では尾張国府跡で類例がみられる。



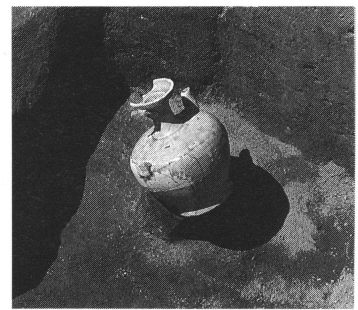
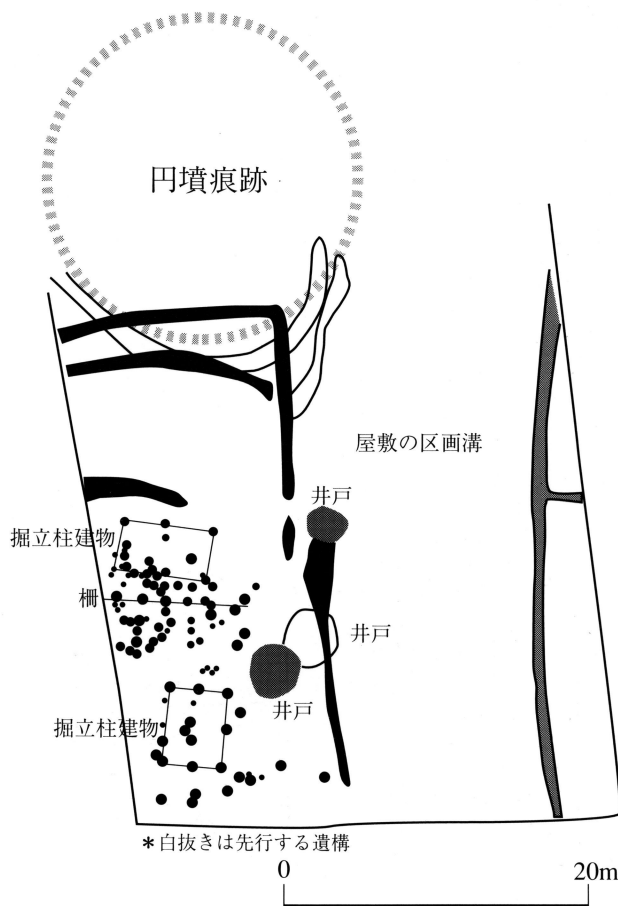
第6図 古代遺構配置図（1：1500）

E期 中世には調査区のほぼ全域で東西南北に走る溝が検出されている。多数の井戸・土坑・柱穴がこれに伴っていることから、屋敷地の区画溝と考えられる。時期は13世紀から15世紀頃におよび、一辺が40～60m程度の方形区画が6区画以上、ほぼ規則的に並んでいる。その中央にあたる96N区北半部から96O区南半部には、一辺約70mを測る大型の方形区画がある。内部にはさらに一辺約40mの方形に巡らせた溝と2基の集石墓、方形土壇群、大型の井戸が位置しており、他の屋敷地とは異なる特殊な区画である。ただし、旧浅谷内は以前として居住には適さない低湿地であったためか、墓域として利用されている。

戦国期の遺構は主として96La区から南の荻安賀遺跡にかけて、および96Q区から北の毛受遺跡にかけて展開しており、八王子遺跡に限っては希薄になる。

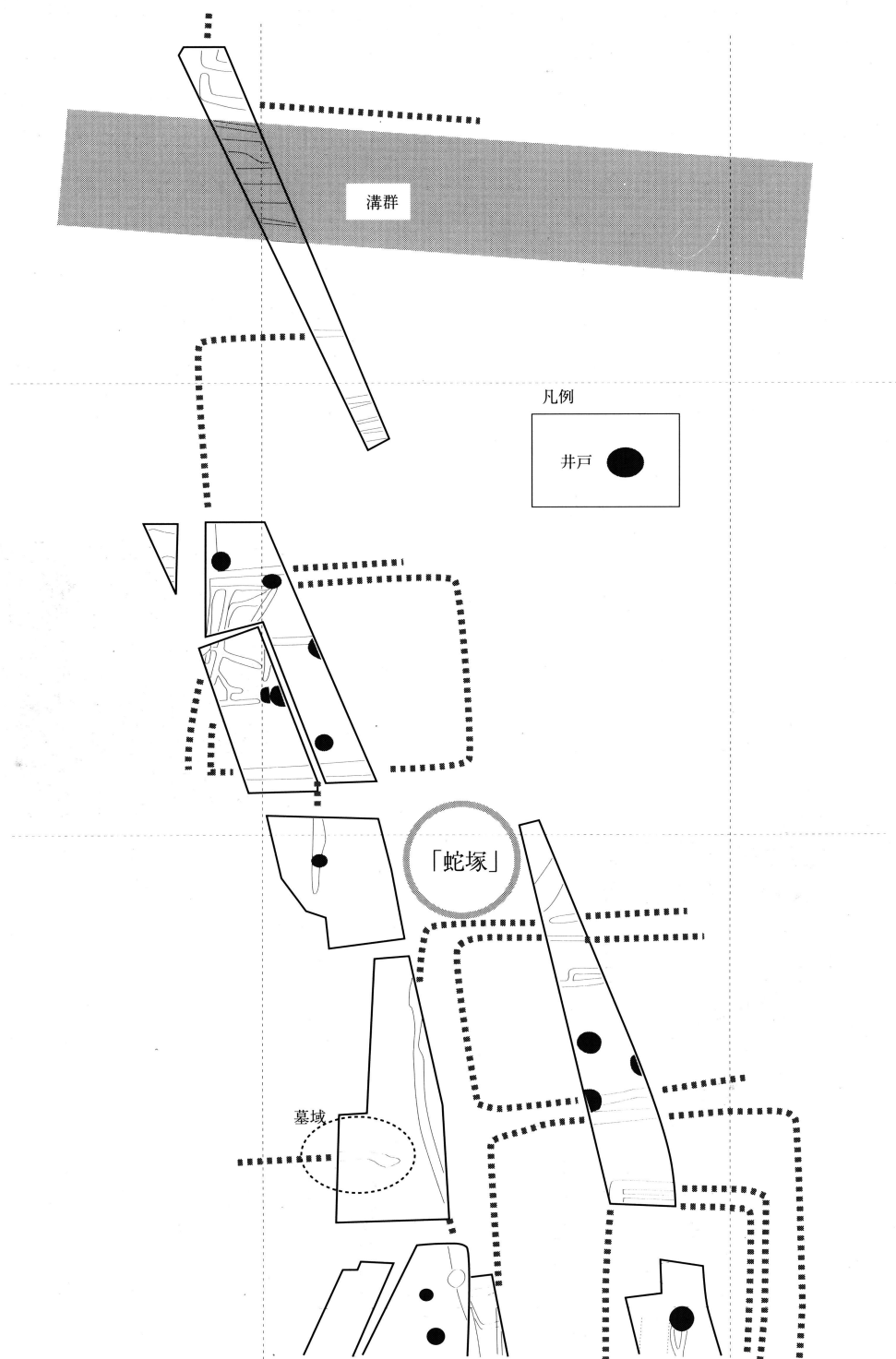
近世の八王子一体は、島畑が点在する水田地帯であったことが明治14年の地籍図からも明らかである。

(樋上 昇)

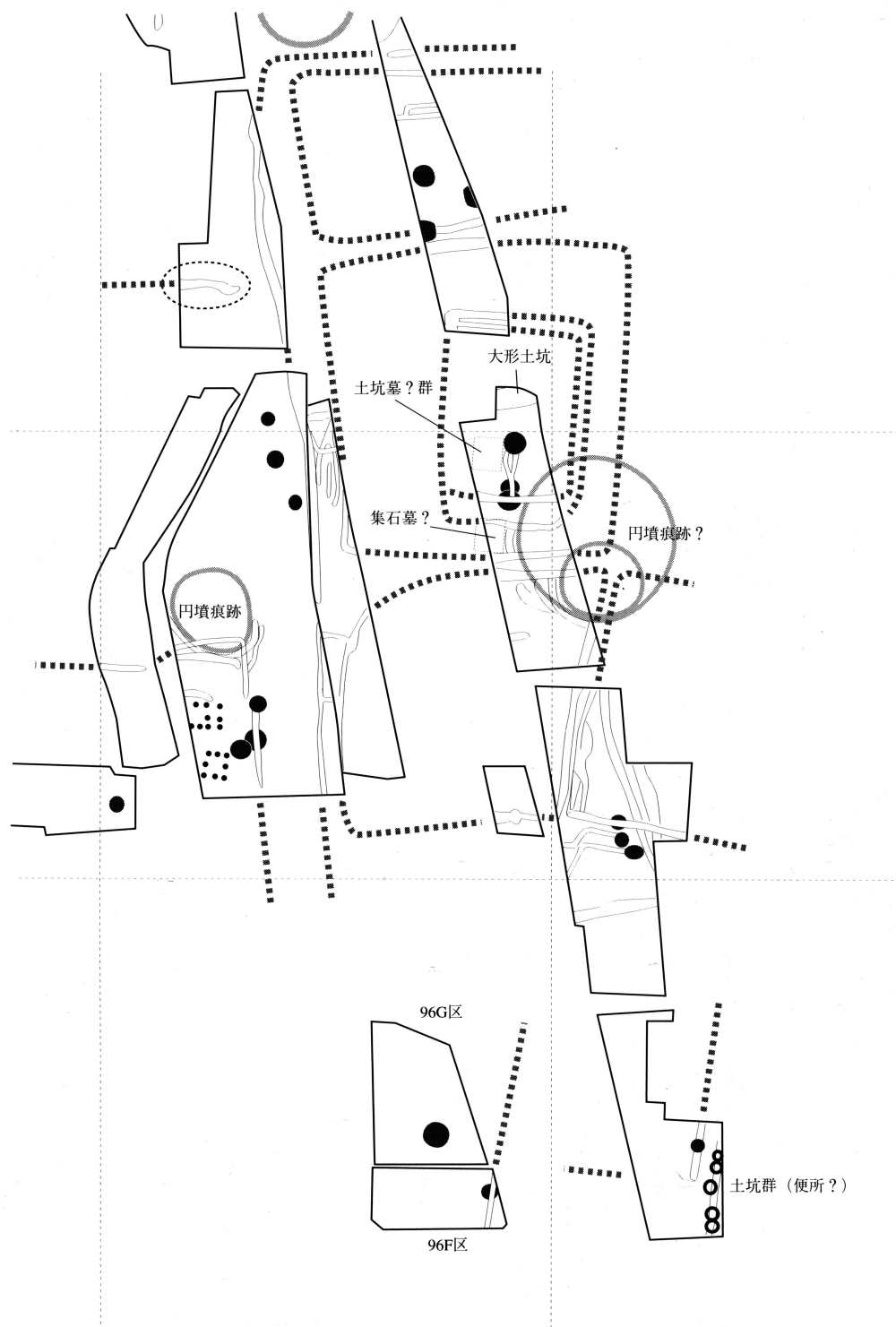


96I区出土水注

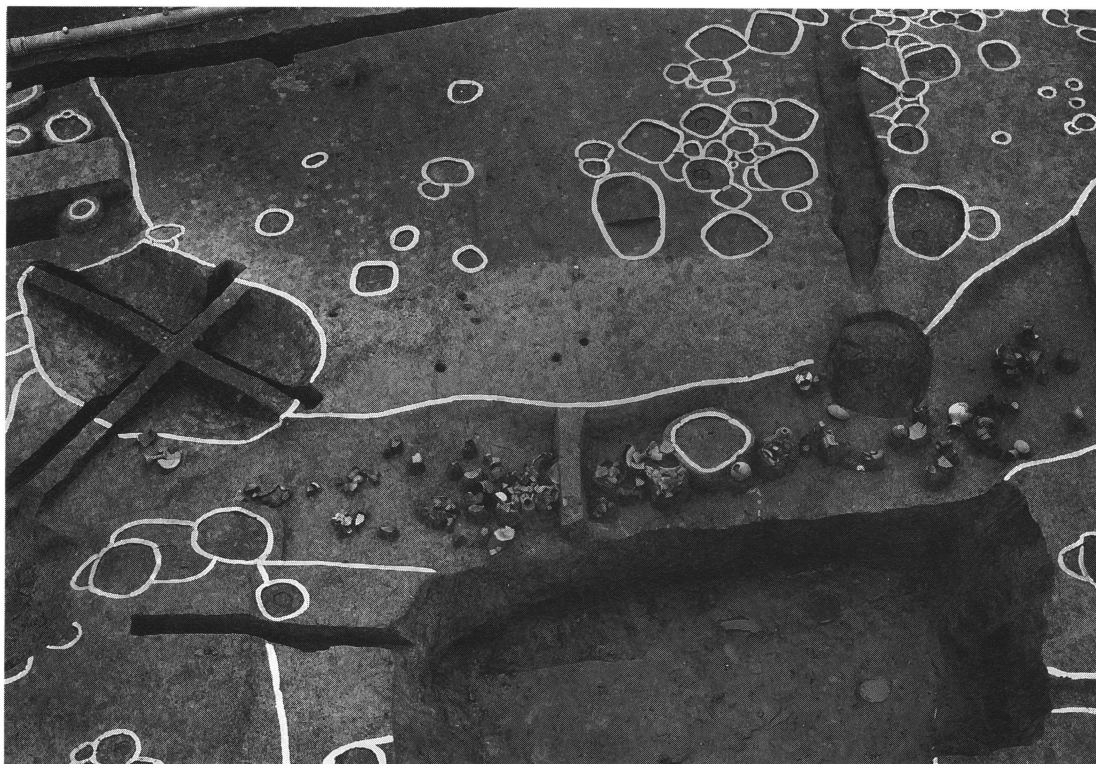
第7図 96I区中世屋敷地 (1:500)



第8図 中世遺構配置図（1：1500）



第9図 中世遺構配置図 (1:1500)



96J区 古墳前期区画溝



96I区 中世屋敷地